

# Tips for Everyday Classes



## 第2回

### 授業力を高める(1)

「質問力」が授業を変える! — 大切なのは説明ではなく、課題や発問の質 —

関西外国語大学 教授 中嶋 洋一

naka-yoh@kansai.ac.jp

富山県出身。英検講師派遣制度では初代から講師。荒れた学校に3度勤務し、そこから学んだことを生かした独自の授業論を展開。指導主事(富山県教委)時代には300余りの研究授業(小・中学校)に助言。教頭(砺波市立出町中学校)時代は、県内外からの希望者を対象に授業を公開するなど、魅力ある授業作りについて考えるきっかけを全国の教師に与えた。著書に、『英語好きにする授業マネジメント30の技』(明治図書)他、共著『だから英語は教育なんだ』(研究社)、DVD『6-way Street』(バンブルビー)などがある。

#### 1 「接近の原理」を学びに生かす

磁石のN極とS極を近づけたときに、互いに引き合うようにパッとくっつく。接近の原理である。知識も同じ。未知のことが、既に知っていることとすぐ近くまで来ると「あっ、そうか!」「わかった!」と、パッとつながる。接近の原理が、近似経験を呼び起こし、暗黙知が形式知へと変化していくのである。

新しいことを頭から教えるのではなく、既習経験につなげようとすることで、授業が質的に変容する。それを可能にするのが、教師の「質問力」である。生徒にとって魅力のある課題であり、タイムリーで的を射た質問である。

#### 2 授業は課題と質問が決め手

前回の生徒や教師の感想で、何が印象に残られただろうか。「ことばは生もの」「頭に糖分」「人間の心の固まり」「潜在能力が引き出される」「一つのライン」「木を見ている」などの部分ではなかっただろうか。

比喩、ポジティブな気持ち、心地よいことばは、心の琴線に触れやすい。感想の中に、教師と生徒、生徒同士、参加者同士の結びつきを読み取っていただけたのではないかと思う。これらのことばが、最後の授業やワークショップの感想に出てくることが私のゴールでもある。

では、そのための仕掛けをどうするか。それは、1. what (何を) 2. how (どのように) だけでなく、3. to whom (誰のために) 4. when (どの時期に) 5. where (どこで) 6. why (何のために) についても綿密に考えた課題や質問を用意しておくということである。これらが一体化すると、授業の質が格段によくなる。

#### 3 課題が、生徒のやりたいものになっているか

「授業をもっと魅力的にしたい。生徒をひきつける授業がしたい!」全国いろいろなところで出会う先生方は、異口同音にその願いを口にされる。しかし、「日々の課題をどうしておられますか?」「授業の最初に与える課題が『え? どうして?』『へえー、おもしろそう』『まさか!』『自分ならこうするな』という気持ちを引き出すものになっていますか」と尋ねると、途端に「メインの活動は考えますが、うーん、課題は特に意識しないですねえ」という答えが返ってくる。文法や語彙の定着のために、どんな活動(ゲームや歌を含む)を仕組むかが関心事になっているからである。

では、実際のところ、日々の授業の課題はどうなっているのだろうか。実は、教室の背面黒板を見れば、日ごろの指導が分かる。あなたの学校の「明日の予定」に書かれ

## 第2回 授業力を高める(1)

「質問力」が授業を変える! — 大切なのは説明ではなく、課題や発問の質 —

ている内容は、次のどのパターンだろうか。

- (1) いつもどおり。持ち物3点セット。
- (2) Unit 3 宿題——単語と本文をノートに写す。
- (3) 未来表現を使ってインタビューをしよう。

(1)と(2)の場合、教科担任は「忘れ物さえしなければよい。あとは私が教える」という考えなのだろう。残念ながら、日ごろから、生徒に具体的な課題を意識させていない、見通しを持たせていないことがよく分かる。

それでは、(3)が「課題」になっているかという、実はそうでもない。何のためにインタビューをするのかが分からないからだ。will や be going to を定着させたいという教師の思いから出た課題であり、生徒にすれば、やらされる活動、必要感を感じない活動である。

そこで、(3)を、次のように変えてみてはどうだろうか。

**「夏休み実態調査クイズ大会——よいクイズはどこが違う?」**

グループごとに、夏休みの旅行先、読みたい本、したいこと、などの中から1つ選び、be going to を使ってクラス全体で実態調査をする。それを、グループ対抗クイズ大会にして、プレゼンテーション(5問のクイズ形式で、調査の結果を発表)するのである。こうすると、授業が問題解決型になり、インタビュー(英語を使うこと)が目的ではなく、情報を得るための手段に変身する。最後は、相手をひきつけるプレゼンテーションの秘訣は何かを話し合う。

このように、課題が生徒の心の中で長続きするものになっていることが大事だ。仮に、教師が与えた課題であっても、最後は生徒が自分の問題としてとらえ、自己決定できるようになっているかどうかが鍵になる。

### 4 | チャレンジしたくなる課題とは?

生徒が目をはかせる課題にするには、学びのプロセスを3C(Chance, Challenge, Change)の流れにすることだ。本文の音読を例に、いくつか紹介する。まず「チャイムにチャレンジ」。日ごろから音読指導(即読即解)に取り組んでいる教師には、お薦めの活動である。学校のチャイムは何秒続くか、ご存じだろうか。大体16秒から20秒である。「チャイムが鳴り始めると同時に音読を開始し、鳴り終わる前に指定された本文(150wpmで計算したチャイムの時間分の範囲)を読み終わる」という課題である。

教師は、どの生徒も読み終わるように、普段から速読の練習をして、慣れさせておく。例えば、指し読みや教師またはCDと同時に読むパラレル・リーディング(シンコペーティッド・リーディング)などである。

活動中は、ストップ・ウォッチと違って、実際に音が聞こえるので、あとどれくらいかが分かり、チャイムが残り少なくなるにつれて、ボルテージが上がっていく。チャイム内に終わって「やった!」という顔をしている生徒たちに終わりのあいさつをする。満足度は声の大きさになって現れる。

次は「**ノームスにチャレンジ**」。1度もつまずかずに、どこまで読めるかを競う。棒読みも、遅いのもNG。ペアで互いに判定して記録する。

3つ目が「**1分間チャレンジ**」。1分間でどこまで読めるかを競う。これも、ペアで互いに確認し合って記録する。

最後が「**ペアでチャレンジ**」。今度はペアで協力する。本文を1文ずつ、交代しながら、間を空けずに読んでいく。指定された範囲の最初から最後までを、1度もつまずかずに読めたら、合格。2人で協力しないとできないので、音読が苦手な生徒が一生懸命に努力をするようになる。

「到達目標がシンプルで分かりやすいこと」が生徒の学習意欲を引き出すのである。

### 5 | 課題を「問題発見型」「問題解決型」にする

課題についてまとめてみよう。良い課題とは、次のようなものである。

- (1) 混乱も誤差も生まれないもの。問いかけが具体的で、何をすればよいかが目瞭然のもの
- (2) 学習展開の動機付けとなりうるもの
- (3) 調べて終わりではなく、持続し発展するもの

そのためには、次の条件が必要だ。

- 知的好奇心がかきたえられる内容であること
- 既習事項を自分で活用できること
- 既知と未知とのバランスがとれていること

実際に、現場でよく見られる課題を上記の条件に合ったものに変えてみよう。学習者の立場になって比べてみていただきたい。

- 「心に残るスピーチをしよう」

→「相手に伝わるスピーチにはどんな要素が必要か」

# Tips for Everyday Classes



- 「現在完了の継続を使ってスキットを作ろう」  
→「現在完了の継続用法にはどんな気持ちが含まれるだろうか。—私のオリジナルスキットづくり—」
- 「東京と大阪はどちらが住みやすいか考えよう」  
→「東京 VS 大阪。住みやすいのはどっち？ 相手が納得するのは意見か、それとも事実か」

最初の課題は、自分が作成（発表）したらそれで終わりというものである。一方、修正された課題は問題解決型になっており、討議をする必然性が出てくる。

良い課題は、生徒が何をすればいいかが具体的に分かり、イメージが持ちやすい。だから、2で述べた6つの要素を意識することが大事なのである。日々の授業の課題とは、「評価規準」を生徒がやってみたいという内容に言い換えたものである。それを授業の最初に板書しておく、生徒も教師も常に意識できるので、授業のゴールやストーリー・ラインがぶれることはない。

課題を考えると、同時に教師の教材観も磨きたい。文法や内容が分かればそれでよしとせず、教科書のメッセージや文脈から読み取れるような課題を考えたい。

例えば、次のようなものだ。

- (1) 登場人物の関係を言いなさい。その根拠となる文を示し、理由を言いなさい。
- (2) 本文中に複数のsがついている文が3つあります。このことから、それぞれ何がわかりますか。
- (3) Thank you. を本文中に入れるとしたら、どこが適切ですか。その理由は？
- (4) この場面で聞こえてくる音をすべて書き出さない。また、その理由を言いなさい。
- (5) 本文を読むときに、ポーズ（空白）が必要なところが3か所あります。それはどこですか。理由は？
- (6) 主人公の感情が最も分かる文はどれですか。
- (7) このページに見出し（英語）をつけなさい。
- (8) （英語の歌）意味を考えて、歌詞にピリオドとカンマをつけなさい。
- (9) （歌：素敵な16歳）2人は、今どこにいますか。
- (10) （歌：So Much in Love）最初、strollだったのに、なぜ最後はwalkになったのですか。

考えるということは、本来、楽しいことなのである。良質の課題や発問によって鍛えれば鍛えるほど、生徒は、教師も驚くような発想を見せるようになる。ワクワクする授業にしたいなら、くどい説明ではなく、「オオッ!」という声があが

るような授業展開を心がけることである。



## 6 | 質問・指示・説明のねらいは何か

課題が準備できたら、次は質問（発問）、指示、説明を手際よく行わなければならない。

まず、質問、指示、説明の違いを認識しておきたい。

**質問** 質問とは、課題をできるだけ持続可能なものにして提示されたもの。学習者の探究心を掘り起こすもの。教師の教材観の具現化であり、本時の生命線（心臓部分）である。

**指示** 活動を正しく促進するために示す手順。多すぎても少なすぎてもいけない。また、生徒がイメージを持てるような、分かりやすいことばであること。タイミングも大切。最初に言うておかなければならないことなのか、最後の5分前に言うことなのか、それを事前に熟考しておく必要がある。

**説明** 既知のことと未知のことがつながるような「渡り」や「活動の意味づけ」の役割を果たすもの。説明をするときは、比喩を使うと、一般化され、より気づきやすくなる。短く、端的に、しかも整理して示されないと効果は薄い。できるだけ具体例（モデル）を示すことである。ゲームなら、代表に演じてもらう。

これらの質問・指示・説明は、いずれも活動を止めて、生徒と目をつないで、ていねいに行うことが大事である。これも教師の「絶対的指導観」になる。指導案では、質問を◎、指示を○、説明を「・」のように印をつけて、違いを意識したい。きっと、授業が変わるはずである。



## 7 | 教師の「質問力」を高める

教師が最初から最後まで丁寧に説明しているようでは、生徒は育たない。入念な準備はするが、肝心な部分は生徒に委ねる。問いかけて待つようにすると、彼らは自ら気づくようになる。教えられたことは忘れるが、自分で気づいたことは忘れない。そこで必要になるのが、教師の「質問力」である。

「質問力が高い」とは、質問の内容が分かりやすいということである。答えを求める質問と、ゆさぶる質問の違いを認識しているということである。「質問力」が高まってくると、「何のために」が意識できるようになる。意見の拮抗が生

## 第2回 授業力を高める(1)

「質問力」が授業を変える! — 大切なのは説明ではなく、課題や発問の質 —

まれてくる。最初の発問(入口)と授業のまとめ(出口)がつながる。また、個々の生徒の実態に応じて、質問を自由自在に使い分けられるようになる。

教師に「質問力」が身につくと、生徒やクラスに次のような変化が生まれてくる。

- (1) 聞く姿勢が育つ。
- (2) 対話型コミュニケーションができる。
- (3) 自己肯定感が育つ。
- (4) 思いやりの心が育つ。
- (5) 共同作業の場面が生まれる。

ワークシートや短冊(裏にマグネットをつけた模造紙やカード)をあらかじめ用意するという授業は、なぜ生徒が乗ってこないのか。それは、すべて教師が持っていきたい方向へ迷わずに行けるように、事前に周到に用意されたものであるからだ。そのような授業では、先に進めるために「閉ざされた質問(closed question)」が多くなる。一つの答えだけを求めるので、生徒はワクワクしない。

次に、学習指導案通りにいかず、時間切れになってしまうのはなぜか。それは、教師の「質問力」が弱いからである。「生徒の意見や考えをとりあげて、つなげていくのが苦手なので、欲張って活動を用意してしまうからである。つまり、自己防御の現れなのである。

生徒の思考力を高めるのは、「開かれた質問(open question)」である。例えば、次のようなものだ。

- (1) イメージを膨らませる質問  
「例えば、～だと想像してごらん。どんなことが必要だと思う?」
- (2) 体験を引き出す質問  
「今まで～したことがある? そのときどうだった?」
- (3) なりきり質問  
「～になったつもりで考えてごらん」
- (4) 対比させる質問  
「比べてみて、分かったことは何と何かな? どこが同じでどこが違う?」
- (5) 理由を聞く質問  
「どうしてそう思う?」「賛成? 反対? その理由は?」

このような質問に慣れてくると、生徒のどの考えを先に示すか、どの順で取り上げるか、といった指名計画(授業デザイン)が、瞬時に頭の中で練られるようになる。教材研究の目的が、知識を効率よく教えることから、授業に深まりを作ること、意見の拮抗<sup>きっこう</sup>を生み出すことに向かうようになる。授業を生徒参画型にすると、多様性が生まれてくる。

教師はあれもこれも教えようとせず、つけたい力(ゴール)を明確にして、活動を7割程度に精選し、残りを生徒に委ねてみることだ。きっと、生徒の力に驚くことになるだろう。

さらに、教師の「質問力」が高まってくると、影響を受けた生徒たちのコミュニケーション能力も高まってくる。コミュニケーションに必要なのは「質問力」だからである。

教師が、生徒の成長を実感すると、もっと力をつけたいという欲が出てくる。そして、「生徒と共に授業を創る」という視点が生まれてくるのである。



### 8 | 質問時に心がけたい2つのこと

教師の良い質問は、確実に生徒に考える力をつける。ただ、実際に質問をするときに、配慮したいことが2つある。

まず、質問の内容(ことば)は、前もって十分に吟味されており、それだけで瞬時に分かるというものでなければいけない。活動(ワークシート)だけ準備して、「エイヤッ!」と見切り発車で始めてしまう授業ほど恐ろしいものはない。吟味されていない質問が分かる生徒は少ない。教師は慌てて「追いかけて質問」をする。思いつきの質問なので、生徒はますます混乱する。不安になった教師は、答えを待たずに、自ら説明し始める。そんな経験はないだろうか。これでは、せっかくの授業が台無しである。

次に、質問をするときは、「間」を意識する。「質問」と「間」は切っても切れない関係がある。「間」は熟考には欠かせない。「間」によって、クイズに参加するようなワクワク感と緊張感が生まれてくる。「間」を普段から意識している教師は、生徒の集中力を高め、授業に「メリハリ」をつけている。もし、静寂が訪れたとしても、教師は焦ったりしないし、すぐに答えを言ったりしない。力のある教師は、「間」を心地よく感じられる精神的なゆとりを持っている。

今回は、「質問力」を高める必要性について述べた。くれぐれも、事前に用意された質問と、生徒の意見や考えに基づくりアルタイムな質問とをバランスよく組み合わせることが大切だ。いずれにしても、教師は、生徒の発想に感動し、敬意を払いながら、質問を楽しみたいものである。

今回は、「授業力(2)」として、「マネージメント力」について取り上げる。生徒は、授業マネジメントが巧みな教師を好きになる。そして、生徒は好きな教師からしか学ばない。それが人の心理である。